

アンケート調査に基づく公立図書館での文庫本の取り扱い状況

竹下朋恵 (lz270018@senshu-u.jp)

植村八潮 (yashio@isc.senshu-u.ac.jp)

*専修大学

1 研究背景と目的

最近になって図書館での文庫本の所蔵が増えているとした指摘を耳にすることが多い。大きなきっかけとなったのは、2017年10月13日に行われた全国図書館大会で文芸春秋の松井清人社長が講演を行い、「売り上げ減少につながるので、文庫本の貸し出しをやめてほしい」との内容を発言し、話題となったことである。その中で、「近年、文庫を積極的に貸し出す図書館が増えています」と述べたが、これに対しては「確たるデータはありません」と補足しているように、「図書館での文庫本の所蔵」調査の資料は見当たらない。

文庫本の多くは単行本の再録だが、「文庫本書き下ろし」や、文庫化の際に「解説」などの独自原稿の追加が行われるなどして単行本と差別化される場合もある。このため文庫本の一部は、単行本の廉価版としてだけでなく独立した図書資料ととらえることもできる。

このように日本の公立図書館における文庫本の取り扱い状況については、不明瞭な点が多いことも図書館と出版社間で論争を生む背景となっている。公立図書館と出版社の間にある議論は、データが不足する中で多分に「感覚的」な面もある。

そこで本研究では、公立図書館における文庫本の取り扱いの状況を明らかにし、公立図書館における文庫本収集の傾向と特徴を考察することを目的とした。また、これによって、図書館と出版社を巡る「感覚的」な議論に対し、根拠となるデータを示すことが出来るのではないかと考える。

2 調査方法

アンケートによる本調査の前に、アンケート設計のためにヒアリングによる予備調査を行った。2018年1月15日～2018年1月23日に川崎市立図書館の一般書担当職員に現地でヒアリングし、その回答を踏まえアンケートを作成した。続いて全国のメールアドレスを公開していて連絡可能な公立図書館(都道府県立、市町村立)1352館のうち、Web及びメールで連絡が可能な732館を対象にアンケート調査を行った。アンケート期間は2018年10月18日～2018年10月30日とした。アンケートはGoogleフォームを使用して作成、メールにて送信を行った。回答はGoogleフォーム、FAX、メール、郵送を使用して回収を行った。アンケート調査は10月30日時点で、276館(回収率38%)の回答を得た。

3 調査結果

3.1 川崎市立図書館を対象としたヒアリングによる予備調査

川崎市立図書館に対して、文庫本の取り扱いについてヒアリング調査を行った。必ずしも図書館として原則

が決まっていなくても考えられることと、担当者から、利用者の傾向や個人的意見を聞く目的から、川崎図書館、幸図書館、中原図書館、宮前図書館、多摩図書館、麻生図書館、高津図書館の7つの分館にヒアリングした。その結果、川崎市立図書館では、文庫本単体で蔵書数を把握していないことが分かった。分館によっては、一部文庫本の所蔵数を検索することが出来る場合もあったが、多くの場合は中央図書館に対して調査を要請しなければ分からないとの回答だった。文庫本は基本的に一般書として分類され、文庫本だけで冊数を数えず、一般書の総数の中に組み込まれているとのことだった。

川崎市立図書館では選書基準を明確に設けているとのこと、文庫本もこの基準に沿って原則的に購入しないことになっていた。もし、文庫本の購入が検討された場合、同タイトルの単行本がある場合は単行本を購入し、文庫本はオリジナル作品か、文庫化の際、内容の追加がされたもののみ購入しているとのことだった。このため文庫オリジナル作品の多い学術文庫やビジネス書など、文学（9類）作品以外のものが多く所蔵されており、文学（9類）作品は寄贈によって入手したものが多くとのことであった。なお、利用者の需要は文庫本の文学作品にある場合が多いことから、開架している文庫本を確認したところ文学作品がほとんどであった。

最近、文庫本の所蔵数に対して増加を感じるかということについては、7館の担当者はそれほど感じないという回答であった。選書基準があるため、今後も文庫本の数に大きな増加はないだろうという見方だった。また、文庫本は造本の堅牢性に問題があり、傷みやすいことで除籍、破棄することが多いという回答もあった。文庫本の造本上の問題や傷みやすさについては、7館の担当者全員が言及していた。また、寄贈図書は、選書基準に照らして所蔵する必要性に欠ける図書は、そのままサイクルに出すという。これらの点から文庫本は、所蔵点数が減りやすい印象があるとした見方もあった。なお、利用者によるリクエストによって単行本と同タイトルの文庫本を入れてほしいとする希望や、映画のノベライズやライトノベル、漫画文庫などのリクエストも多いため、近年、文庫本の需要の高まりを感じているとした回答もあった。

以上をまとめると、川崎市立図書館は文庫本の資料数を把握しておらず、蔵書データ上は、一般書と区別せず扱っていた。また、選書基準から原則、文庫本を収集せず、資料的堅牢性の面などからも図書資料としての所蔵優先度は低い。さらに、所蔵する場合であっても、文庫オリジナルであるか、寄贈図書の中から所蔵するかのどちらかであり、特に文学は寄贈されることが多いということであった。ただし、所蔵されている文庫のうち開架されているものは、利用者のニーズに即して文学作品が多くあり、必ずしも利用者ニーズと図書館の収集方針が一致しているとは言えない。

3.2 全国の公立図書館を対象としたアンケート調査

国の公立図書館に対し文庫本の取り扱いについてWeb及びメールでアンケート調査を行った。まず、文庫本収集の有無に関しては、回答館276館中263館（95%）の図書館が収集していると答え、回答館のほぼすべての館で文庫本を収集していることが分かった。文庫本を収集していないと答えたのは15館（5%）であった。このことから、一般的にはほぼすべての館で文庫本の収集が行われているが、ごく一部の館では文庫本を収集していない状況があるといえる。

文庫本の所蔵状況については、一般書に占める文庫本の割合は2割未満とした図書館が、回答館212館中207館であった。その中でも1割未満であるとした図書館が157館と過半数を占めていた。また、大多数の図書館では所蔵されている文庫本の7割以上が文学（9類）の本で、文学以外の文庫本は3割以下にとどまっていた。

文庫本の収集状況については、大多数の図書館で、購入と利用者からの寄贈の二つの方法で収集されていた。

一部の図書館では、利用者に文庫本の寄贈を求めていることが分かった。最も多い文庫本の収集方法は購入であった。寄贈された文庫本をどの程度受け入れるかについては、概ね3割未満を選択した図書館が回答館268館中135館で全体の半数を占めていた。このことから、寄贈による文庫本の受け入れ冊数は、それほど多くないと考えられる。

文庫本に関する選書基準についてだが、文庫本に対しては、ほとんどの図書館で収集や所蔵、保存に関して明確な基準を設けていないことが分かった。文庫本に関する選書基準の有無については、回答館数276館中272館の回答があり、そのうち28館が文庫本に関して基準を設けていると回答した。その内容は、文庫本オリジナル作品のみ収集すると回答した図書館が16館と最も多かった。次いで多かったのは、文庫本を原則として収集対象としないと回答した図書館で7館あった。ただし、このような図書館でも文庫でしか手に入らないものは収集対象としているとのことから、オリジナル作品のみ収集するとほぼ同回答と考えられる。なお、アンケート調査にて一部図書館の自由記述回答に、文庫オリジナル資料が増加しているという回答があった。また、文庫のような安価な図書資料は、利用者が個人で求めるべきであるという回答もあった。

全体的に文庫本の収集に関しては消極的であり、基本的には単行本での収集を原則としていると分かった。ただし、文庫オリジナル作品、文庫でしか手に入らない図書、蔵書にない図書、改題して文庫化したもの、内容追加のある文庫本、利用度の高い図書資料の文庫による複本、郷土資料など、一定の条件を満たす文庫本については収集を行っていることが分かった。このような文庫の収集に対して限定条件を設ける理由としては、堅牢性に乏しく保存に適さないためと答えた図書館が最も多かった。次いで、資料の多様性を確保するため、内容の重複を避け、幅広く収集するためと回答した図書館が多かった。また、保存スペースの関係と答えた図書館もあった。大多数の図書館において、文庫の造本や内容の特徴など文庫本の資料的特性が図書館利用にはそぐわないという観点を持っていた。以上をまとめると、大多数の図書館は、文庫本の特徴（単行本の再録が多いこと、堅牢性に低い簡易な造本なこと、廉価な価格帯であること）を理由として、文庫本の収集に関する基準を定めていた。

また、全国アンケートでの結果は、図書館資料収集方針に従って文庫本を積極的には買わないこと、資料的堅牢性が乏しい点から図書資料としての優先度は低いとみていること、所蔵される文庫本は文庫オリジナルの資料を購入するか、寄贈図書の中から所蔵するか2パターンであることなど、多くの点で川崎市立図書館のヒアリング調査結果としていた。

以上のことから、日本の公立図書館における文庫本の取り扱いについての傾向・特徴には4つのことが言える。

- ① 9割以上の図書館で文庫本を収集している。
- ② 文庫本は一般書のうちおおむね2割未満を占めており、所蔵されている文庫本の7割以上が文学作品（9類）である。
- ③ 収集方法は購入と寄贈が主流であり、基本的には購入で入手されている。
- ④ 文庫本に対して規定を設けている場合は少ないが、資料的特徴を最も多い理由として所蔵優先度はおおむね低い。

4 考察と課題

図書館における文庫本の所蔵については、「図書館は文庫本を積極的に所蔵し、貸し出すようになった」「図

書館の文庫本所蔵数が増えた」といった「感覚的」な捉え方がある。しかし、今回の調査結果を踏まえると、そのような文庫本への「感覚的」な捉え方とは異なった状況であった。

まず、図書館は原則文庫本を収集しないという姿勢を示しているところがほとんどであり、例外としてオリジナルのものだけ集めるといった決まりを設けていた。このため文庫本の収集に対しては、むしろ消極的と言ってよい。ただし、文庫オリジナル資料が増加しているという回答からうかがえるように、文庫本の内容そのものが時代とともに変化する中で、例外的に収集対象になる資料が増えていると捉えている向きもあった。また、文庫本形態の資料を所蔵してほしいという利用者の要求もあったことや、予算・スペース上の都合、利用される機会が多い資料は副本として文庫本を所蔵する場合など、図書館サービス上のやむ負えない所蔵もあることが分かった。

今回の調査は蔵書データではなく客観的な回答ではなく、アンケート調査による回答者の主観的見解が含まれていることが考えられる。ただし、蔵書データに基づく調査は、文庫として分類していない例が多いことから、困難と考えられる。そこで、今後の課題としては、アンケート回答図書館から、いくつか抽出してヒアリング調査を行うことで、さらに分析を深めることである。ヒアリングで明らかにしたい事柄としては、①文庫本の所蔵数に変化を感じるか。②文庫本の貸し出し数に変化を感じるか。③文庫本の貸し出しで多いジャンルは何か。④文庫本を図書館で借りることについてどう思うか、の4つである。

また、そもそも文庫オリジナルの出版が増えていることも考えられる。文庫本に関して統計的にまとめられているものなども参照するとともに、文庫本の出版サイクル、文庫化にあたって解説の有無など、文庫本の内容の独自性や市場状況の変化についても調査を行う必要がある。

参考文献

- [1] 松井清人(文芸春秋社長)「文芸出版社の立場から図書館を考える一文庫は借りずに買ってください」第103回全国図書館大会ホームページ掲載原稿 第21分科会出版と図書館「公共図書館の役割と蔵書、出版文化維持のために」、2017
- [2] 川井良介編『出版メディア入門〈第2版〉』日本評論社、2012
- [3] 河井弘志ほか編『図書館員選書・4 蔵書構成と図書選択 新版』日本図書館協会、1983